

氏名	小野 綾香
ヨミガナ	オノ アヤカ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第286号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 ロシア歌曲研究——ショスタコーヴィチの歌曲集《風刺（過去の情景）》Op. 109を中心とした歌唱音声の追求—— 〈演奏〉 リムスキー＝コルサフ 4つのロマンス作品3・作品40 ラフマニノフ すべてを奪われた 他 ショスタコーヴィチ 《風刺（過去の情景）》Op. 109 他

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	永井	和子
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	勝部	太
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	佐々木	典子
副査	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	福中	冬子
副査	東京音楽大学	講師		サブリーナ・エレオノーラ	

（論文内容の要旨）

「言葉」とは流動性のある、しかし可能性に満ちた「音」である。どの国にも音声学としての基準はあるものの、実際の日常会話においては話し言葉の癖や、語尾の処理の音声が入それぞれに違っているように、例え同じ国籍、民族だからといって同じように話す事は有り得ないのである。言葉を扱う歌手もまた、同じ曲を歌っても誰一人として同じにはならず、言葉に対する扱いは楽譜に特別に指示ある場合を除いてその多くが歌手の教養と感性に委ねられてきた。

本論文はその「言葉」に対してどのようなアプローチが出来るのかを研究し、日本人歌手がどのようにロシア歌曲に向き合っていくべきかを模索したものである。音程によって、また場面によって言葉の発語方法、温度感、方向を選ぶことで、音楽はより聴き手の心にダイレクトに訴える事の出来る、肉厚な芸術となり得るだろう。そして延いては、その技術は先人の名手たちによる録音に溢れたこの時代において、生きた演奏家が聴衆の前で演奏することの大きな意義に繋がるのではないかと感じるのだ。

取り上げる歌曲集《風刺（過去の情景）》Op.109は、ロシア人の本質的な性格が色濃く現れたショスタコーヴィチの芸術作品である。筆者にとってこの歌曲集は、風刺を楽しむ国民性への、作曲家の愛着が感じられる所や、作品が聴衆と同じ土壌の上に存在し、詩を見据えているように感じるという点で、ラフマニノフやプロコフィエフ等とは違う特別な位置づけにある。

例えばラフマニノフの歌曲はしばしば音楽が詩を飛び越えてしまっ、聴き手を彼の音の世界へと陶酔させるような歌曲が多いのに対し、そこから50年程経ったショスタコーヴィチの歌曲は、音楽によって詩の世界が疎かになるという事がなく、むしろ音楽や詩といった境界を乗り越え、大変純度の高い人間の本質を見せるのが魅力である。それは濁ったブラウン管越しに見る景色ではなく、同じ目線で同じ空気を吸う者の奏である、人間味溢れる音楽である。制限の厳しい時代にあっても、どうしても伝えずにはいられなかった作曲家の心を強く感じるこの歌曲集の中に、筆者は「人間の尊厳と美しさ」を感じ、作曲家の詩へのこだわりと信念に共感した。ロシア人のユーモアと社会批判の混在したこの歌曲を日本人がどう取り組めば良いのか、音声としてどのような歌唱の工夫があればこの作品の魅力を引き出せるのか、それらを研究するのが本論文の目的である。

第一章ではロシア語の基本的な音声について述べる。その上で、歌唱の際の理想的な母音位置や子音の発音方法について論じ、それぞれの音声の魅力と可能性について考察する。第二章では、本論文の中心となる歌曲集、《風刺（過去の情景）》の基本情報と、初演者のインタビューを記載。また、既存の有名な作品から句や旋律を引用しパロディー化するという歌曲集の大きな特徴に焦点を当て、その意図を考察する事で第三章へと繋げる。続く第三章では前章の考察を引き継ぎつつ、実際に歌曲集の中で、音声の工夫がどのような演奏効果に繋がるのかを探る。また、演奏法についても触れ、この歌曲集の魅力を引き出すための表現を考察する。

本論文の核となるのは、指導教員である永井和子先生と、モスクワのノーヴァヤ・オペラ劇場専属歌手、イリーナ・ロミシェフスカヤ女史による指導である。第三章では詩行における母音の繋がりや子音の響きを抜き出してどのように構築していくかを考察したり、映像のようなリアリティを備えた音楽を、聴衆と共有、体感するための工夫を考察している。

イリーナ・ロミシェフスカヤ女史のレッスンでは日本人にとって思いつきもしないような感覚を要求される事も多く、それらは日常的なロシア人の感情なのだが、筆者にとっては全てが新しく、驚きの連続であった。そして、この日常的な感情こそがこの歌曲集に必要なものであることも知った。また、ロシア語本来の音の美しさを味わいながら、作曲家が楽譜に込めた想いを掬い取って形にしていくという作業は、自身の演奏に確信を持たせ、曲や作曲家、ロシアへの愛情を深めるものでもあると改めて強く信じるようになった。

論文は上記の内容で結びとしているが、しかし演奏家である限り、歌唱音声の探求は生涯終わる事がない。本論文によってまきようやく先を照らすランタンを手に入れ、ロシア歌曲演奏家を志す者としての入口に辿り着いた心地である。このかけがえのない喜びを胸に、更にロシア歌曲への研究を深めていきたいと考えている。

（総合審査結果の要旨）

〈論文〉

本論文はドミトリー・ショスタコーヴィチの歌曲集《風刺（過去の情景）》Op. 109(1960)を取り上げ、日本人歌手としての立場から、歌唱音声の追求を行ない、この作品の魅力を引き出すことを目的としたものである。第一章で、ロシア語の基本的な音声について述べた上で歌唱の際の理想的な発音方法を論じ、その魅力と可能性の考察を行なっている。第二章、《風刺》の基本情報と、既存作品からのパロディー化に焦点を当て、その意図を考察。第三章は《風刺》において、テキストの解釈を含め、各楽曲の詳細な分析を行なっている。内容は実践に則った説得力のあるものになっている。ただ、第二章で《風刺》の歴史的な位置づけに十分な記述が割かれていないのが残念である。しかし、この論文は実技系の理想的な論文の仕上がりがあり、今後ロシア歌曲を学ぶ歌手にとってのガイドラインとなり得るとの高い評価である。

〈演奏〉

論文執筆での努力が生かされ、それによって裏打ちされた見事な歌唱をくり広げていた。プログラム前半リムスキー・コルサコフ作品3、作品40（共に「4つのロマンス」）は艶やかな音色で、研究を積み重ねたこの申請者によってロシア語の美しさが流麗な旋律線に命を与えていた。ラフスニノフの4曲は、場の空気をガラリと変え、言葉を超え、音の世界へと陶醉させる様なこの作曲家の世界感を余す所なく描いていた。後半、今回のテーマでもあるショスタコーヴィチの作品：シェイクスピアの劇音楽《リア王》《ハムレット》より、クルイローフの2つの寓話、そして《風刺》（過去の情景）は圧巻。短期留学をし、ロシア人歌手とピアニストから直接指導を受けた事が大きな進歩と表現力の深まりをもたらしていた。申請者が目指した「ロシア人の心を訴える」作品がこの日、日本人である申請者の魂を通し昇華された事は見事な成果と言えよう。以上審査会一致を持って合格とした。